

メッセージアウトライン ヨハネの福音書18：1～11 「父が下さった杯」

イエスは過越の祭りの六日前にオリーブ山のふもとのベタニアの町に弟子たちとともに来られた。→ヨハネ12:1(土曜日) 六日後にイエスは捕らえられ(木曜日)、理不尽な裁判の後、十字架につけられることになる。(金曜日) ベタニアには以前、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロがいた。→ヨハネ11章 ラザロの姉妹はマルタとマリアであり、彼女たちは自分たちの家でイエスの一行を夕食でもてなし、マリアは高価なナルドの香油をイエスの足に塗り、自分の髪の毛でその足をぬぐった。これはイエスに対する感謝の思いからであり、イスカリオテのユダはその行為を咎めたが、イエスはその香油注ぎは「わたしの葬りの日のために、それを取っておいたのです」と弁護された。→ヨハネ12章 この時点では弟子たちはまだイエスの十字架に至る受難を理解していなかったが、マリアの行為ははからずもイエスの死のための備えとなったのであった。翌日(日曜日)イエスはろばの子に乗ってエルサレムへ入城され、人々は歓呼の声で迎えた。→ヨハネ12:12-16

「イエスは、昼は宮で教え、夜は外に出てオリーブという山で過ごされた」→ルカ21:37(日～木)

イエスは最後の晩餐の席上で過越の食事をされ、弟子たちへの説教をされる。この時、ユダにサタンが入った。イエスはペテロがイエスを知らないかと否定することと、彼の信仰がなくならないように祈ったことも告げられた。→ルカ22:1-38(木曜日)

イエスは弟子たち及びその後に信仰を持つ者たちの喜びが満ち溢れるように、また彼らの守りと一致のために長い祈りをされた。ヨハネ17章(木曜日)

[1-2]「これらのことを話してから、イエスは弟子たちとともに、キデロンの谷の向こうに出て行かれた。そこには園があり、イエスと弟子たちは中に入られた。一方、イエスを裏切ろうとしていたユダもその場所を知っていた。イエスが弟子たちと、たびたびそこに集まっておられたからである」

イエスは弟子たちとともにエルサレムの二階の部屋を出てエルサレムの町の東側にあったキデロンの谷を渡り、その向こう側に行かれた。ここにははっきりとは書かれていないが、そこはオリーブ山であり、園とはゲツセマネの園のことである。→ルカ22:39、マタイ26:36

「ゲツセマネ」とは「油しぼり」という意味でこの山で栽培されていたオリーブがここで油をしぼられたのであろう。エルサレムは神殿のある聖なる都であり、山の上にあり、土地が狭く住宅も多かったので裕福な人々は私有の庭をこのオリーブ山に持っていたのである。このゲツセマネの園もそのような個人の庭の一つであり、生け垣か柵で囲ってあったと思われる。ここはあのニコデモ(ヨハネ3章、19:39)やイエスを自分の造った墓に葬ることになるアリマタヤの金持のヨセフ(マタイ27:57~60)のような秘かにイエスの弟子となっていた人か、あるいはイエスから病気を治してもらい心から感謝していた人か、そのような人が、イエスにエルサレムに来た時はどうぞいつでもあの園を使ってくださいと伝えておいたのかもしれない。

そのようなわけで、このゲツセマネの園はイエスと弟子たちがたびたび訪れ、そこで会合をしたり、疲れをいやしたりしていたのである。それゆえイエスを裏切ったユダもその場所をよく知っていた。

[3]「それでユダは、一隊の兵士と、祭司長たちやパリサイ人たちから送られた下役たちを連れ、明

かりとたいまつと武器を持って、そこにやって来た」

「一隊の兵士」とはローマ兵で通常は六百人で構成されていた。「下役たち」とは神殿の守衛隊のことである。彼らはかくも大勢で、しかも物々しく、明かりとたいまつと武器をもって裏切り者ユダの手引きでやって来た。時は過越の祭りの時期であり、一般にその頃は満月で夜でも十分視界が効くほどであった。それなのに明かりとたいまつをわざわざ持って来たのはイエスが逃げ隠れても捜し出せるようにという配慮からであったのだろう。

[4-5]「イエスのご自分に起ころうとしていることをすべて知っておられたので、進み出て、『だれを捜しているのか』と彼らに言われた。彼らは『ナザレ人イエスを』と答えた。イエスは彼らに『わたしがそれだ』と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らと一緒に立っていた」

イエスは堂々と彼らの前に立たれ「わたしがそれだ」と言われた。他の福音書ではここでユダが自分が口づけをする者がイエスなのでそれを捕えよという記事がある(マタイ26:48、マルコ14:44、ルカ22:47)がここでは省略され、ユダはもう完全に脇役にされており、イエスの力強さ、権威、積極性が前面に押し出されている。

[6]「イエスが彼らに『わたしがそれだ』と言われたとき、彼らは後ずさりし、地に倒れた」

なぜイエスがひとこと言っただけで敵が後ずさりし、バタバタと倒れてしまうのか。実はこの「わたしがそれだ」という言葉は大変重要な言葉で原文では「エゴーエイミ」という言葉であり、かつてモーセがイスラエルをエジプトから脱出させるために神によって選ばれたときに、人々からその神の名は何かと聞かれたら、何と答えたらよいでしょうかと尋ねたとき、神は「わたしは『わたしはある』』という者であると答えられた。→出エジプト3:13~14 その「わたしはある」と同じ意味の言葉なのである。つまりイエスはここで神の御名を使ってご自分を示しておられるのである。

このイエスにある神の御名、神ご自身の力によって人々は圧倒されて後ずさりし、そして将棋倒しのようにバタバタと倒れてしまったのである。

[7-8]「イエスがもう一度、『だれを捜しているのか』と問われると、彼らは『ナザレ人イエスを』と言った。イエスは答えられた。『わたしがそれだ、と言ったではないか。わたしを捜しているのなら、この人たちは去らせなさい。』」

イエスはそのひとことで敵を地に倒れさせるような力と権威を持っておられるお方であるので、逃げようと思えばいつでも逃げられ、敵の真ん中を突き破って行くぐらいはいとも簡単なことであっただろう。しかしあえてそのようなことはせず、ユダもよく知っているゲツセマネの園へ行き、そこで夜を過ごされたのは全くのご自分の意志であった。そして今、逃げも隠れもせず、敵の前で堂々と「わたしがそれだ」と言われ、さらに「わたしを捜しているのなら、この人たちは去らせなさい」と弟子たちを守ろうとされている。

[9]「これは、『あなたが下さった者たちのうち、わたしは一人も失わなかった』とイエスが言われたことばが成就するためであった」

このイエスが言われたことばは→ヨハネ17:12 もし弟子たちも捕えられていたなら、信仰から脱落する者が出ていたかもしれない。そのような危険から守るためにイエスはここで能動的にみことばを成就されるのである。事実、弟子たちはその後、死に至るまでその信仰を全うし、イエスの弟子として素晴らしい働きをする者となった。

[10]「シモン・ペテロは剣を持っていたので、それを抜いて、大祭司のしもべに切りかかり、右の耳を切り落とした。そのしもべの名はマルコスであった」

そんなイエスの思いを少しも知らず、弟子のシモン・ペテロは剣を抜いて、大祭司のしもべを打ち、右の耳を切り落とした。彼の名はマルコスという。原文では「しもべ」に冠詞がついており大祭司のしもべとして名の知れた人物であったと思われる。

ペテロは先生の一大事とばかりに力づくでイエスを守ろうとしたが、それはイエスの望まれる方法ではなかった。

[11]「イエスはペテロに言われた。『剣をさやに収めなさい。父がわたしに下さった杯を飲まずにいられるだろうか。』」

並行箇所のみか22:51ではイエスはマルコスの耳にさわって癒されている。すなわち元通りにされたのであった。これはイエスゆえにおできになったことである。

さらにマタイ26:52-54では「剣をもとに収めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今すぐわたしの配下に置いていただくことが、できないと思うのですか。しかし、それでは、こうならなければならないと書いてある聖書が、どのようにして成就するのでしょうか」と言われている。

すべてこうなったのは神の救いの計画の実現であり、預言の成就であり、「父がわたしに下さった杯」なのであるとイエスは言われる。そしてその杯をイエスは今飲み干そうとされている。

まさに権威ある者、周りの敵に少しも動じることのない王としての姿がここにある。

イエスは力のないお方ではない。志半ばで失敗し、殺されてしまったあわれな宗教の教祖でもない。イエスは神の人間に対する愛とその救いの計画を実現しようとして、まっすぐに父なる神のみこころに従われる力ある、勇気ある、雄々しいお方、神の御子であり、すべてのものの王であるお方なのである。

イエスは私たちの自己中心で決して神に従おうとせず、自分が王様で世界の中心になっており、そのような外的生き方、罪の暗闇の中に生きている私たちを救うために、この世に人となって来てくださり、本来ならば私たちが神の前にさばかれて滅びに行かなければならないのに、そのような私たちを愛して私たちの罪の贖いのために十字架にかかってくださった素晴らしい救い主なのである。イエスは父なる神が下さった杯を飲まれる。

今、イエス・キリストを信じる私たちも、信仰者として神が下さる飲むべき杯というものがあるのではないか。従うべきみことば、負うべき重荷、歩むべき道のり、退けるべき肉体的な思い、改善すべき人間関係、戦うべき罪、目指すべき目標があるはずである。

私たちも父なる神が与えてくださる杯を退けるのではなく、受ける者となり、そのことによって神の栄光を表す者となっていきたい。→ヘブル12:2～3